

肩機能不全の患者における肩甲上神経障害の診断について：5 症例の報告

高濱 照

西日本リハビリテーション学院

目的：肩甲上神経障害(SSN)は、見落とされるか、肩峰下インピンジメント症候群(SAIS)や腱板損傷、頸部神経根障害のような他の疾患に誤診されやすい。過去の報告では、10 人の SSN のうち 2 人が SAIS として肩峰形成術を施行され、1 人が椎間板切除術を受けた。他の 27 人の SSN 例では 6 人が胸郭出口症候群として処置され、3 人が椎間板切除術を受けた。この症例報告の目的は SSN の鑑別診断を記述することである。**症例報告：**患者(女性 1, 男性 4)の年齢は 29.6 ± 6.8 歳で全員が SAIS の診断であった。5 人とも肩後方に痛みがあったが他動 ROM の制限はなかった。MMT(徒手筋力テスト)では 5 人に棘下筋, 4 人に棘上筋の筋力低下があった。棘下筋は内旋 45° でテストされ、棘上筋は肩甲骨面で「空容器」法(empty can)でテストされた。4 人に棘上筋、棘下筋萎縮を観察した。

5 人とも上腕二頭筋、三頭筋の反射は正常で、C5-T1 の表在感覚も正常であった。Spurling テストはすべてに陰性であった。ホーキンスとニアのインピンジメントサインは全員が 1 つのサインに陽性で 3 人が両方のサインに陽性だった。4 人に有痛弧があった。針筋電図では線維攣縮と陽性鋭波が 4 人の棘上筋、1 人の棘下筋に見られた。他の C5, 6 支配筋の筋電図は正常であった。神経伝導速度で 4 人に肩甲上切痕で、1 人に棘白蓋切痕で SSN が確認された。

考察：最終的に肩甲上神経障害と SAIS の鑑別診断が残った。われわれは SSN によって起こされる筋力低下の結果として、二次的に SAIS を生じたと仮定する。したがって SAIS のサインや有痛弧は鑑別には役に立たない。

鑑別診断としては、棘下筋の筋力低下と萎縮は有用であろう。また筋電図の異常性が SSN の診断を確認するために必要であると思われる。腕神経叢障害、頸部の神経根障害から SSN を区別することにおいて、筋電図は特に有用である。

Walsworth MK, et al : Diagnosing suprascapular neuropathy in patients with shoulder dysfunction : a report of 5 cases. Phys Ther 84 : 359-372, 2004

慢性呼吸不全患者における排泄時の呼吸変化

長野恵子

西日本リハビリテーション学院

この研究は、排便(もしくは分娩・出産など)に生じる腹腔内圧の上昇は、呼吸筋力低下を伴う患者において臨床上重要であるとし、排便によって誘発される呼吸変化の測定を慢性呼吸不全の患者を対象に行っている。

閉塞性および拘束性肺疾患を呈する 24 人の対象者は、すべて 6 分間歩行(3 回実施)にて、動脈血酸素飽和度(SaO_2)が有意(5% 以上)な低下を呈す状態である。その内、長期酸素療法を受けている 13 人のグループ(A)と、酸素療法を受けていない 11 人のグループ(B)に分類した。

方法として、洗面所に行く前(ベッド上安静座位)と便座着座時、排泄後(安静)約 3 分間経過した際の血圧、呼吸数、ボルグスケールを測定した。動脈血酸素飽和度と心拍数は連続的な記録を実施した。測定した酸素飽和度および心拍数は分散分析での検定を行い、呼吸数は T 検定を実施した。また安静時と排便時および 6 分間歩行時の変化を比較するために T 検定またはウィルコクソン検査を用いた。

結果、安静時と比較して排便は患者の両グループで有意な低酸素症を引き起こした。呼吸困難、心拍数、呼吸数はともに増加し、3 分後も回復に至らなかった。統計較差は 2 つのグループで認められなかった。6 分間歩行と排便との動脈血酸素飽和度の相関関係は認めなかった。

まとめとして、呼吸器疾患の患者は呼吸困難の発生を予防するために、歩行・料理・入浴などの毎日の生活を制限することができるとは、排便は避けることのできない行為である。排便後の 3 分後は心拍数および呼吸数は依然として高値を示しており、呼吸器系が負担を強いられていることがわかり、排便後の休憩が必要であることが示唆される。軽度の低酸素症状の発現でさえ、高度の不整脈を伴うことがありえ、排便中の失神や死亡の報告があることは驚くことではないとされている。

Delmastro M, et al : Respiratory changes during defecation in patients with chronic respiratory failure. Eur Respir J 23 : 617-619, 2004